

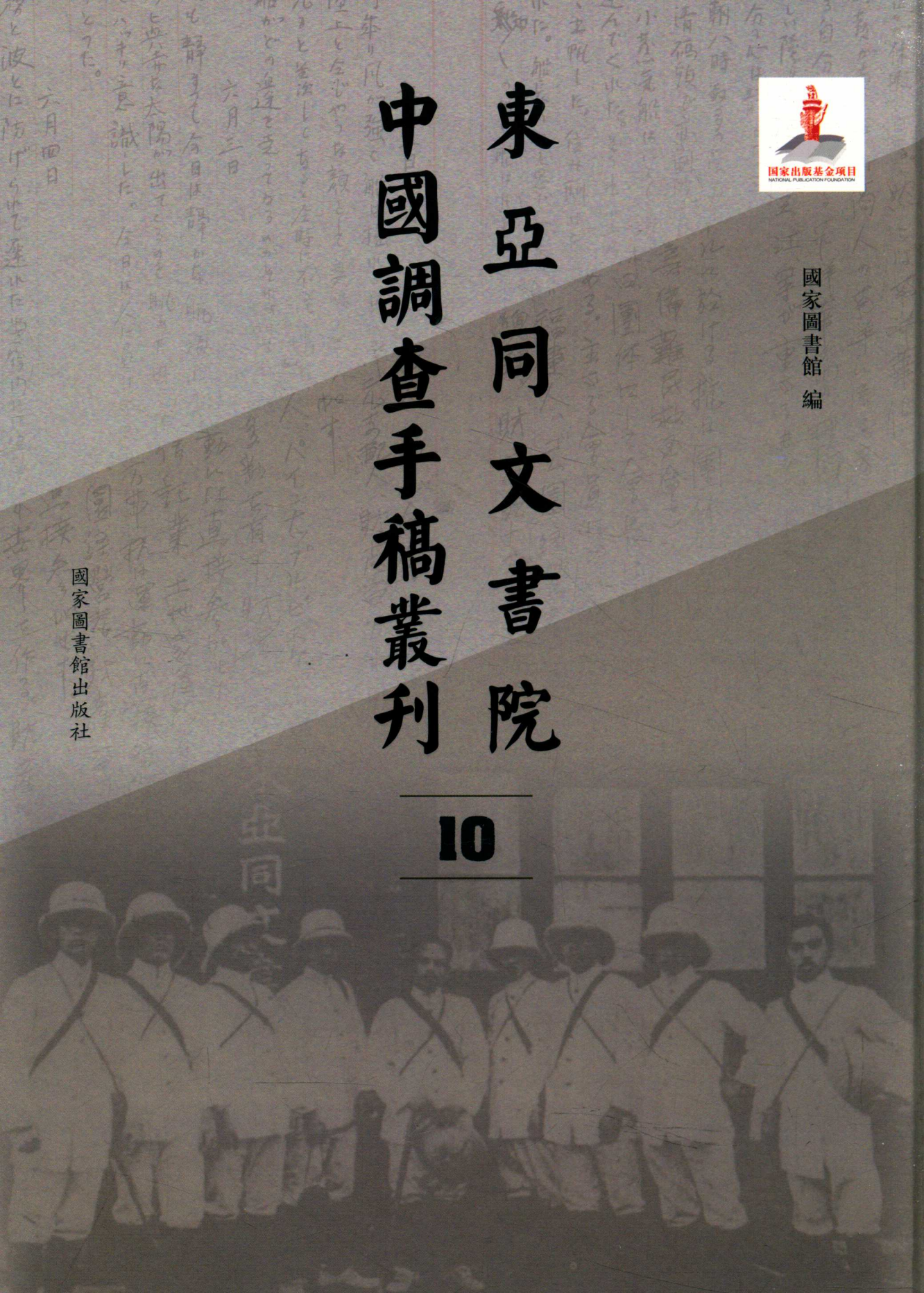


國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

10

國家圖書館出版社



國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

10

國家圖書館出版社

第十冊目錄

昭和三年（一九二八）旅行日誌（第二十五期生）

金丸榮	第一卷第一編	一
楫數一	第一卷第二編	三九
稻城勝	第一卷第五編	一一三
鹽原長衛	第二卷第一編	一五三
和田喜一郎	第二卷第二編	二四一
新谷音二	第二卷第三編	三八五
百瀬清治	第二卷第四編	四八五
新村寛	第三卷第一編	五四九
佐藤治平	第三卷第二編	五八五
志田薰	第三卷第三編	六二一

昭和三年六月

旅行日記

第二主期生
金丸 策

故國へ旅行の挨拶

皆様にリンデンの並樹の輝く若葉も日毎に新緑の度を増して参りました。アカシヤの緑葉の陰影も力強く初夏のリズムが蠢めまわります。

斯くて私達が志を大陸に抱いてから既に四回目の初夏が訪れまわりました。東亜の安泰と国々四億の民の平和の策を叫んで首途の歌が今迄とも消え行きまわります。

この時にあつて星平野に臨み頃々月大江に瀕いて流るゝとあがせんとした江南の地から大いなる響きも擡げて、その月日に大陸への旅へようとしてゐるのも實にその首途の歌に報るためのものです。

私達の世の若人は、もと昔々長江に舟を伴へ湖北西南の野を縫ひて洛陽へ戻り、天下の難を承承を越へて、

辰安の城壁に月を仰ぎ懐古の思ひにさいなまれつゝ、さて
は世草泰山の山河の彩、幾番秋の雨と風とに、のじりの跡を
偲み、斯くして東洋文化の繁華地たる中原を縦断するの
希望に燃へておもしろ。

と云はれ、近身の支那の時局は走馬燈の様に、変轉極りなり、
秋風も星もそのうちか、今度の國民革命軍は楊子江を
越へて北に進出してゐる。支那の天に大なる変革
をもたらし、殊に鄭州徐州濟南を繞る地支那帯の不
安なところ、今更中上ぐるまでも有りません。

い楊子江を繼ぐて支那の中流を北へ貫く、秘魯の旅は海路直
ちに北上して、魯燕から南北兩湖の旅へかゝるの余儀
なくせう、北の光を求めたのです。

和達に北院野間抱きおれ、海の水へようとしてゐるのです。

憶ふと、私達の先輩が赴きし年、貝に幸甚なり、
或る時は荒世の急を省し、而かも生命を賭せ、敢然いと踏
みしるゝをたゞの尊厳と、嚴肅なる意義とを有する大
旅行の旅へどんとするは、あつて、私達は、心を打ち込んで、生靈
の全部を捧げて、その大旅行の成果を後につけねばならぬといひ
に願ひありき。さうして、果に困苦に堪へ、紙喝を煮て
食へる隣人の心になり、体はなほ歸りて参りねといひます。
中華の富強、山東をさるゝ、水南青島の夕へは、改國を
おもひ、天津橋下、風に千年の鏽も多し鐘の聲響く、
燕京を越えて、翌日の世に汽車が高梁、繁、満洲の
野をいど、人へを走りするは、いつれも月の末の方と思ひます。
もと世を此限り無き、萬里の旅、疲れたる魂は、新しい力
をばさしむるは、何よりも、骨髄のゆくりと思ひます。

幾つもの他國の驛で故國からの懐しの便りや私書を持て来る
のを見ることが出来た。私書は友那摩の書といふ。その下は
想ひを綴り上げる。是迄の旅を終り、月再會する日
は、ともなう燭を剪て、数々の旅物語りに耽るもの、はな
となくやゝを樂みはるゝ。

この旅は、幾つもの意の通ふ故國の驛を懐い
て、長途の旅へ参ります。折角の故國の驛を懐い

左様あらう。

上海東亞同文書院

天津駐在班 金丸 榮

第一卷 調査旅行日誌

三月廿一日 水曜日 曇天

五同圖

本朝船が朝霧の海に東支那海を航行多しと云ふに、實に
長航船の航行を吹く其の音が異様な感事を感じさる。
寸先をも見る事が出来ない。本船は徐航を初めた。入航時
の懸念の様子也。

船中の無電は左の如事を報告せり、

船中最大海軍大元帥陛下行艦上向電を下さり、

東洋利加嘉湖太平洋横断航行スミズ大船は昨日午後九時

降参せりと、

南北航線開通に備へて、

王正廷は清國の日支交渉に備へて、

村松を渡り、王正廷は清國に渡ると、

今期各第4隊、北隊、南隊、東隊、西隊、
並井中尉、小隊長、尉、
（山東省、只航路、
軍事時代、北隊、
人）

勤務、船、停船、
か、午後、
衛、
上陸、
我、
上海、
難、
日、
後、
其、

上海の町に比較すると青島の町は、
難あり、
日、
後、
其、

所山下汽船伊藤氏を訪問せし是より其の著書故郷牧師

新村氏を訪問せし。又青島身請を知るを以て朱永在。

又青島学院の吉田氏を島村氏の紹介で面晤談話するを

多し。市街は陸軍のオーストリア隊に占領せられ、戦時氣氛の如し。

新市に於て其の國長官兩河將を名馳寫真班と自命を其の中

にありて撮影せし。其の田舎の如く、若新開社の社員村に於て歸社者

と運送船社を訪問し、便船を以て、突然出航し、日食

便の會談する。同船に於ては教員も亦なく、次便に於て歸社

に決す。

本期の遊藝劇場氏の宅で、好意を蒙り、書院の禮状、

同安會館、維新會、板橋區長、銅像建設の件を以て、

中、又氏の懷古談、書院生、後代を語りて下され、余等

後世の教員と結へる。感謝の外無き也。

青島 土曜

曇天

曇り

午前中、青島市場を見学す。内地出張人續々来る。

青島市街は日独戦争を思ひ起さざる程、赤毛紅毛隊士の町を、
特に青島花屋及び毎日、歓迎せらる。仕事もあふれ、うれしい。
中學校の次には女子中學校、小學校と交代で近所に行き、様子を見
るとは、實際の様だった。其程内地の貧人が、当時無地へ
運ばれた。

官崎氏の所子供達と青島駅跡を見学に行き、墳墓に独逸もよく
やてゐる。砲臺、砲台の傍に船は流石、独逸などのみだり。
市外東北に巨ヶ山（旭山）ヒルマク（馬鞍山）モリヤ（若嶺山）は
昔に独逸の軍艦が陣地であつたといふ。砲台下海沿河の左岸は
昔も独逸の本所、警備があつたといふ。右翼より小港山、小
港山、堡壘、中央堡壘、台東鎮東堡壘、海岸堡壘

1914年11月11日 青島 土曜

と云。中津堡壘は山縣團の村々射が古正年上目より半先づ
 半先づ半入と領せし堡壘には有名である。此等の戦跡を
 見、後者青嶋中学校 総督公館を見る。史蹟碑の遺蹟を
 薩摩藩の地所を以て先づ村上と云ふ村同せし折よく
 其の事を記す。あるを記し。書院の現状を作証せし如
 大受意を記す。其の故は群衆。青嶋生西の模様を所聞
 され。奥様も、ゆとり。もてなして下つた。愉快な園樂、
 内に上時就休した。

六月二日 日曜日 晴天

以前中村上氏の案内を受け、青嶋神社^及青嶋氣象台を見
物と氣象台上の山から青嶋市街が全軒見渡される
十時より青嶋市の内好者を白飯米と九水鎮樹柳並見物に
お懸ける。

青嶋の後方は緑山脈が直進して降り、市街を赤山脈が直
進する。其線と市街との間は平原に落ち居る。日独戦
争の時この市街即赤山脈の線が独逸軍の前進陣地であ
り。其市街から市街の東に赤山脈の線が直進して居る。

我軍が市街の東に赤山脈の線が直進して居る。日独戦
争の時この市街即赤山脈の線が独逸軍の前進陣地であ
り。其市街から市街の東に赤山脈の線が直進して居る。

其の内九水鎮に居る。
青嶋市東部の約七五里、緑山脈に居る。其の南に居る。